

『閨飾り -アルファ王は踊り子に恋慕する-』

著：高月紅葉

ill：笠井あゆみ

「わたしのすべてをきみに捧げる……。今夜から、すべてを分けあおう」

甘く見つめてくるアッドに見惚れ、ジニアは微笑みを返しながらかえた。

「俺が性悪だったら、どうするんだよ」

「ならば、好きにならなかった。きみは性悪じゃない。もしも、これからそうなるなら……きみを変えたのはわたしということになる。きみを悪いほうへ導いたなら責任を取るよ。なににより、すべて、好きになる」

「そんな……」

都合のいいことばかりと言いかけて、言葉を呑んだ。

アッドが覆いかぶさってくると、ジニアの心は自然と震えてしまう。なにも言えなくなり、膝がゆるむ。そしてそれを恥ずかしいと感じて、また震える。

「男は、はじめてなんだ……」

おずおず打ち明けると、髪を撫でられ、肩に指が這った。

「わたしもだ。でも、作法はわかっている。感じる場所も……」

肌をたどられ、胸に行きあたる。

「そこ、感じない」

ジニアは自己申告したが、身を屈めたアッドはやめなかった。指でそっと押され、もう片方の胸にくちびるが近づく。

「……っ」

軽く肌を吸われて腰が疼いた。感じたことのないくすぐったさが全身を巡り、身をよじらせたジニアの肩にアッドの手が押し当たる。

押さえつける仕草さえ優しい手にほだされ、ジニアはくすぐったさをこらえた。

乳首がかすかに尖り、こりこりと転がされる。

「アッド……。ん……」

思わぬ吐息が鼻に抜け、ジニアはくちびるを引き結んだ。

「まだ、だめか」

からかう声に問われ、しこり立った部分をくちびるに挟まれる。舌でちろりと舐められ、ジニアは自分の口元を覆い隠した。声が出ないように我慢する。

されていることよりも、しているアッドがいやらしかった。高貴な男が、平たい胸に頬を寄せて、小さな突起を丹念に舐めているのだ。

見たこともないぐらいに卑猥で、なまめかしく、思った以上に興奮が煽られる。

ジニアの反応を確かめながら動く舌づかいで、淡く色づいた突起がこりこりと転がった。くすぐったさは小さな快感の灯火に変わり、くちびるできゅっと吸いあげられて声が洩れる。

たまらずに身を揉むと、アッドの手がジニアの下腹部へ伸びた。布越しに、芯の入った部分を揉みしだかれる。

ジニアはたまらず、後ろ手で這いあがった。

「嫌になった？」

問いかけてくるアッドの手は動き続ける。やわらかな幅広のズボンが引きおろされていく。淡い葡萄色を目で追い、髪を乱したジニアは息を詰める。

嫌がっていないことは、ぶるんと飛び出した雄の象徴が示していた。

「どうされるのが好きなんだ。教えてくれ」

「……いや、だ」

ぶるぶると首を振って、握ろうとするアッドの手を押しよける。淡い明かりのなかでも、彼に見られることが恥ずかしい。大きいとか小さいとか、そういうことではない。

ジニアはたまらずに身をひるがえした。素早く背を向ける。自分の股間を手で覆い隠したが、背後から伸びてきた指にゆっくりと探られていく。

「アッド……嫌だ、いや……」

「こんなになっているのに？」

まだ服を脱いでもいないアッドの息づかいが、熱っぽくジニアの肩へと降りかかる。

押し当たった腰はごりっと硬く、戸惑いながらも喉が鳴ってしまう。アッドが本気で興奮しているのがわかり、自分だけでないことに安堵する。

股間を隠した指のあいだへ、アッドの太い指が入ってくる。そっと寄り添って開かされ、絡みあった指がジニアの肉棒を掴んだ。

これまでの経験とはなにもかもが違い、崩れ落ちてシートへ片手をつく。ゆっくりとしごかれ、腰のものはまたむくむくと伸びあがって育った。

「あ、あ……、あっ……」

「ジニア、正面からしてもいいか」

「だめ……やだ……だめ」

首を振ってなおも拒むと、小さなため息に耳元をくすぐられた。あきれているのではなく、感じ入った甘い息づかいだ。

「どうしたらいいんだろうね。ジニア……。きみがかわいくてたまらない。このまま、食べてしまいそうだ」

「……え」

指が腰裏に当たり、そのまま臀部の割れ目へ忍びこむ。

「あっ……」

人に触れられるのははじめての場所だった。そこを使うのだと悟ったジニアはあわてて腰をよ

じらせる。逃げたかったが、アッドの片腕が前へまわっているの、うまく動けない。

ふたりの指が絡んでできた手筒が動き、じわりと溢れる快感で腰あたりが熱くなる。汗ばんだジニアは羞恥に打ち震えた。

「……ん……。あ、ん……っ」

臀部の谷間へ差しこまれた太い指を過剰に意識して、その先を期待してしまう。相手はアッドだ。そう思うだけで、秘めた性欲が猛り、乱れた感情が増幅する。

生まれてはじめて、その場所を探られたいと思い、そんな自分に惑う。どうしてと問う暇はなく、ジニアは広場の喧噪を思い浮かべた。熱狂して踊る男女の息づかいが、この船のなかにも満ちている。

アッドの指は唾液をまとい、ゆっくりと押しこまれた。何度か離れ、濡れて戻り、手筒にしごかれて喘ぐジニアを開いていく。

「あ……。くう……っ」

ずっぽりと挿れられているのがわかったが、根元まで到達せずに限界が来る。ジニアのそこはきゅうっとすぼまり、アッドの指を締めあげた。

「……ああ」

アッドが小さな感嘆の声を洩らす。指は遠慮がちに動きだした。ジニアの内壁を傷つけないように、ずっ、ずっと引き抜かれる。

「んんっ……。ああ……。ツ！」

浅い場所をこすられると、ジニアの昂ぶりが手筒のなかでぴくんぴくんと跳ねる。待ちきれずに自分で手を動かすと、あとはアッドが主導した。

「あ、あっ……」

「ジニア、気持ちいい？」

「……あ、いい……。うしろ、じゃなくて……っ」

「どっちもよくなる」

そう言いながら、アッドは両手を器用に動かした。右手でジニアの熱をしごき、左手ですぼまりを探る。両方を責められるジニアは息も絶えだえになって上半身を伏せた。

腰が前後に動いてしまい、それを背後から見下ろされている恥ずかしさに身悶える。乱れた髪は汗に濡れて肌へ貼りついた。

「ん……。ああ……。アッド……。出る……。もう……」

腰の動きは止められず、ジニアは自分の股間から手を引き抜いた。すべてをアッドに委ね、シーツを両手で掴む。快樂の波が押し寄せて、欲情の足元が濡らされる。

「あぁっ！」

すぼまりに押しこまれた指がぐりっと動き、内壁がえぐられた。それと同時に、こりこりとしたなにかを押しえられた。

「んっ……」

ジニアは息を呑み、奥歯を噛んだ。身体がぶるっと震え、欲求を訴える間もなくパタパタッと

白い体液がこぼれていく。

「ん、ん……や……」

始まったものは止められず、うつぶせのまま腰を揺らす。足先を立てて身体を支えた。

アッドの手筒が動き、残りを搾られる。

「あ、う……ツ」

シーツを掴み、ジニアは額ずいて腰をあげる。しごかれる快感に溺れ、ひとしきりの悦を食った。

息が乱れ、肌が汗に濡れ、ジニアは朦朧としながら身を起こす。

しかし、腰が引き戻され、臀部が違和感を覚えた。ぬめった液体が谷間へ落ちて、肌が濡れていく。

その直後、丸々と太ったものが押し当てられた。

「……ジニア、力を抜いて」

優しさを装っても、男の欲望は隠しきれない。肩越しに振り向こうとしたジニアは腰を掴まれた。指とは比べものにならない太さが、潤滑油を助けに押しこまれる。

「あ、あ……くっ……」

ジニアは喘ぎ、身を揉んだ。嫌だと言うつもりはなかった。けれど、はじめてのことだ。

どうすれば痛みを感じずに抱かれることができるのかがわからない。

恐怖を感じはじめた瞬間、アッドの息づかいが肩甲骨に触れた。

「やめようか……？」

弾む息をこらえた声は紳士的だ。そう聞こえるために、最大限努力しているのだとわかる。

ジニアが興奮しているのと同じで、アッドもふたりの行為に溺れたいと願っているだろう。好きだと言ったのはアッドだから、当然のことだ。

しかし、ジニアの怯えを感じ取ったいまは、こうして動きを止めてくれる。

「いい……、やめ、ないで……」

答えながら、ジニアは一度だけ、腰を掴んでいるアッドの手に触れた。ぎゅっと握ってから離し、挿れやすい位置に腰を合わせる。

アッドの欲情を背に受けてはじめて、ジニアは自分の気持ちが嘘偽りなく理解できた。

この男に惚れている。理由はいくつでも思いつく。そうでなければ、こんなことにはならない。心乱れて快感に溺れ、すべてを渡したいなどとは思はずがなかった。

そして、添い遂げられないとわかっているからこそ、すべてを投げ出してみたい。ふたりの思い出に、愛を交わして別れたい。

「アッド……欲しい……」

口にすると、胸がかきむしられて痛んだ。恋心の激しさに翻弄され、痛みが沁みる。

涙ぐんで熱くなるまぶたを閉じたジニアは、押しこまれる肉棒のすさまじさを繊細な粘膜で感じ取った。欲情に流されて、ろくに確認もしなかったが、アッドの体格から考えれば並みの大きさではないはずだ。

正直なところ、逃げ出したいほどこわかった。

自分が抱く側だったからわかる。男との交わりは服従の恐怖だ。体格の勝る相手に火がつけば、いくらでも乱暴なことをされてしまう。それは性的な手管の上手下手ではなく、心持ちの問題だ。

アッドは奪わないと言ったが、無自覚に身勝手な男は山ほどいる。ジニアだってそうだ。そして、いまはじめて、そんな行為が、受け入れる側の心を傷つけると知る。

しかし、ジニアは彼が欲しかった。優しさを信じてすべてを投げ出し、ひとつになってみたい。

「……ジニア」

先端をぐっと押しこんだアッドが動きを止めた。どうしたのかと息をひそめると、肩にキスが落ちる。

「本当に……？」

アッドのささやきの意味がわからず、片手で身体を支えて振り向く。彼のくちびるがそばにあり、端を狙ってキスをする。

その瞬間にも、ジニアは恥じらいを覚え、頬を真っ赤に染めた。尻のあいだに挟まった違和感に、この男と交わっている実感が湧いてくるせいだ。

恥ずかしい。本当に恥ずかしい。ジニアはせいいっぱいの強がりですぐ笑い、一夜だけの恋人を見つめる。

「……優しく、して」

甘えた声は出せず、硬い声になる。アッドは浅く息を吸いこみ、苦しげに眉根を引き絞った。背中へ重なる汗ばんだ肌が熱い。

くちびるが触れあい、楔がいつそう深く差しこまれる。

「ああ……っ」

身体を支えていられなくなったジニアは泣き伏せるようにシーツを掴んだ。

潤滑油がぐちゅりといやらしげな音を立て、ふたりの肌と肌が触れあう。アッドはやはり紳士的だった。ジニアの望みどおり、優しく腰を動かす。

同じ男だから、その動きのつらさはわかっていた。

もっと激しく腰を動かしたいはずだ。好きならなおさら、すべてをぶつけたいと欲求する。

しかし、アッドはゆるやかに動き、しきりとジニアの肌を撫でた。乱れた髪が片側へ避けられる。まるで、理性を示す行動だ。だから、犯されているのではなく、抱かれているのだと心から感じられる。

「んん……、あ、あっ……」

ジニアは甘い声をあげてアッドを受け入れた。

自分がいままで経験した性行為のすべてがまがいものだったと知り、むせび泣きたい気分になる。相手に悪いと思ったし、自分にも腹が立つ。しかし、すべてを忘れさせるほどに、アッドの優しさで胸がいっぱいになる。

「苦しくないか……」

根元までは入れず、アッドがかすれた声で聞いてくる。こわがらせまいとする口調は穏やかで、ジニアは自分が若く未熟な女性になった気がした。

生まれてはじめて女になる瞬間が、これほどまでに優しく穏やかな愛に満ちていたら、その先の人生はどれほど豊かになるだろう。そう考える。

「だいじょうぶ……動いて……」

息を整えて許しを与えても、アッドは慎重に動いた。

ジニアの尻を割り開き、濡れていることを丹念に確かめる。見下ろしながら出し入れをされ、受け入れるジニアはいっそう羞恥に喘いだ。

恥ずかしくてたまらないのに、やはり、すべてをアッドに見て欲しくなる。

「きれいだ、ジニア。きみの身体は、引き締まっていて、しなやかで、女とはまるで違う」

「ん……」

褒められて、肌が熱くなる。自分を女のようにだと思ったことを忘れ、ジニアは身体の奥底からこみあげてくる男の欲求に悶えた。

達したばかりのものが揺れて、また熱を帯びる。

アッドを包んだ場所が狭まり、彼の低いうめきが肌に落ちた。それが嬉しくて、もっと聞きたくなる。男の身体だが、夢中になって欲しかった。そして、もっともっと、褒めて欲しい。

「アッド……。好き……」

言葉が自然と溢れ、耳にしたアッドの下半身がまた成長する。

「嬉しいよ、ジニア……。わたしも、きみが好きだ」

ジニアの甘い言葉を、快感の証しと受け取ったのだろう。アッドはゆっくりと幅の狭い抜き差しを始める。

それでも、ぎっしりと詰められ、内側から押し広げられた肉壁は過敏に反応した。

ジニアの声はあられもなく上擦り、アッドも興奮を募らせた。汗が背中に落ちてきて、胸が押し当たる。背中からまわった手で乳首を探られ、ジニアは快感に身悶えた。

「あ、あっ……アッド、アッド……」

好きだと思い、愛して欲しいと願う。

揺さぶられたジニアは苦しさを忘れ、未知の感覚に恍惚とした。肌が汗ばみ、指先に力がこもる。

このまま、一緒にいたい。

そう強く感じて、シーツから手を離す。

奪って欲しい。奪われたなら、この男と生きていくことができる。

しかし、望みは口に出せなかった。これほど優しく抱いてくれる男が、ジニアの自尊心を踏みにして強奪するわけがない。だからこそ、好きになった。

優しくて穏やかで、目を奪われるほどの気品を感じさせる最高の男だ。

「アッド……噛んで……」

思わず口走り、首をそらす。

「ジニア……きみは、オメガだ。そんなことをしたら……」

乱れる息の合間に言われ、ジニアはかぶりを振った。それはアッドの勘違いだ。

「俺は、ベータだ……。真似ごとでいい……。だから、噛んで……噛んで欲しい」

声が甘えの響きを含んでかすれ、身体が小刻みに震えた。ぶるんぶるんと揺さぶられる股間が白濁をこぼして濡れる。

「アッド……お願い……っ」

身体の内側に熱が広がり、ジニアは泣き声で訴えた。天井がまわる気がして、息がかすれる。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>